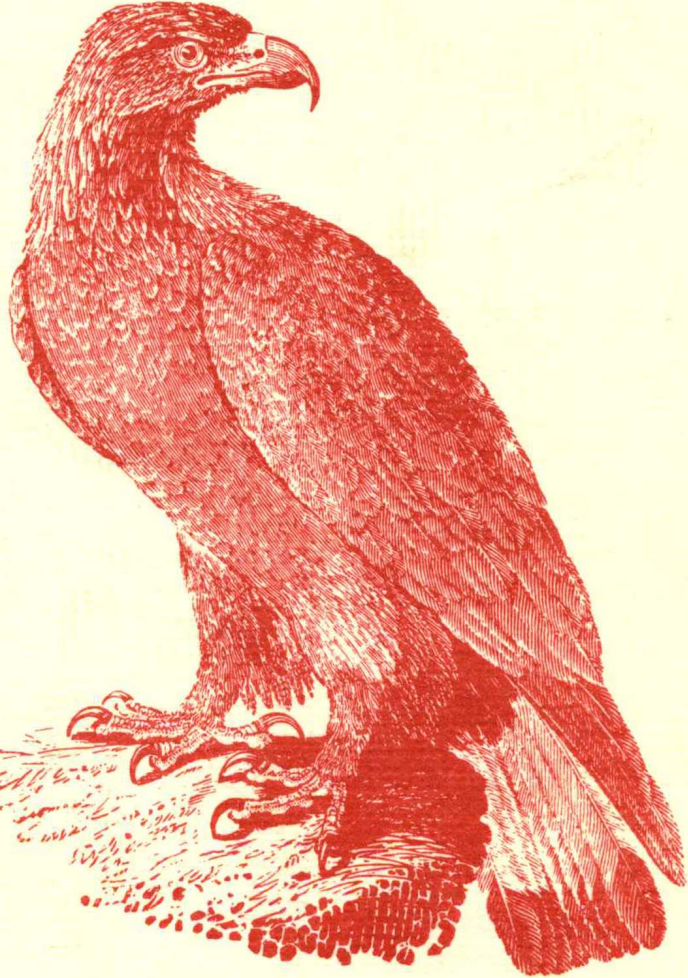
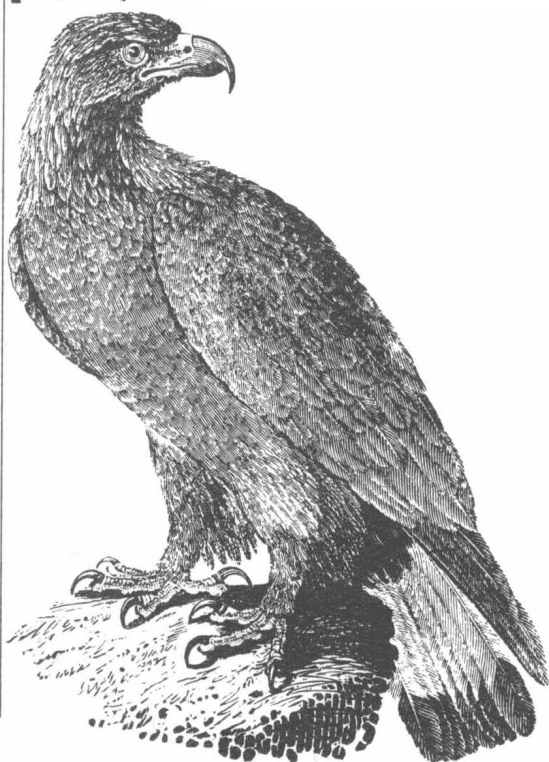




燃える男の肖像

木本正次



著者紹介

大正元年十月徳島県生まれ。神宮皇学館卒。毎日新聞社に入り、編集局の各部長職等を歴任。のち作家に転じる。

〈主なる著書〉

『黒部の太陽』(毎日新聞社、講談社刊)

『香港の水』(講談社、潮出版社刊)

『反逆の走路』(毎日新聞社刊、のち「夜明け

の挑戦」と改題して新潮社刊)

『四阪島』(上下巻、講談社刊)

『砂の十字架』(講談社刊)

『東への鉄路』(講談社刊)

『砂からの門』(日本能率協会刊)

『黒潮の碑文』(毎日新聞社刊)

その他多数。

燃える男の肖像 定価 一四〇〇円

昭和56年10月30日 第1刷発行

著者 木本正次

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二丁目二二二

郵便番号 一一二

電話 東京(03)九四五一一二二二(大代表)

振替 東京八一三九三〇

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 株式会社堅 省 堂



0023-458713-2253 (0) (学1D)

落丁本・乱丁本は、御面倒ですが、小社書籍製作部宛にお送り下さい。送料小社負担にてお取り替えます。

目

次

＊

燃える男の肖像

政治の季節	254	臭生水株の女	7
三本の矢	237	石油の履歴書	22
東山油田	220	尼瀨海岸	49
機械掘り一号井	186	アメリカの情報	77
海中油田	146	蝙蝠翔んだ	125

あとがき	417
老兵は消える	412
絶頂期	396
米社の撤退	380
再びアメリカにて	352
大合同	335
米社、上陸す	323
転換のとき	302
欧米の旅	269

装
幀
＊
神
長
文
夫

燃える男の肖像

臭生水株の女

明治十九年五月の、或るよく晴れた夕刻であった。

越後の国の旧城下町——新潟県古志郡長岡町の神田町という商店街を、一人の若い男が歩いていた。男は洋服姿であった。黒っぽい背広に、当時は一般にそうであった固い白い、高いカラーのワイシャツを着込み、襟元には黒っぽいネクタイを結んでいた。まだ三十には手が届いていないようで、中肉中背の、丸い穏やかな顔付きであった。

町は、かなり賑わっていた。このあたり一帯は日本屈指の豪雪地帯で、冬は何メートルもの積雪の中に、家も道路もすっぽりと包まれてしまう。

それは見渡す限りに広い長岡平野全体がそうで、東は郊外の東山という山並の稜線から、西は、南から北に流れている信濃川のやや向こうに、川に沿って南北に連なっている西山という低い山脈の稜線まで、目に見える限りが白いカーペットに化けてしまう。日本一の大河、信濃川だけが、その上に真っすぐに投げ出された一本の青い帯であった。

その雪も、ひと月余り前に消えていた。梅が咲き桜が咲いて、それももう散り果てようとしていた。信濃川の堤防の猫柳を先陣に、木々が新緑の芽をもやし、町のところどころの空地には、背の低い雪椿が赤い小さな花を咲き残らせていた。

長い雪の下の生活から解放された近郷の農家の人たちが、いそいそと買い物に集まっていた。夕食の買い出しなのか、町のおかみさんたちの姿も混り、その女たちの足元では、小さな子供たちが金切り声を上げて、騒々しく走り回っていた。

そんな賑わいの中で、男の洋服姿は異彩であった。県庁のある新潟の町では、明治十三年に東京から新潟新聞にやって来た青年主筆・尾崎行雄の洋服姿が有名だったし、いまでは県庁の役人のなかには洋服を着ている人も多少はある。けれども長岡では、県下第一の商業都市と誇ってはいても、洋服姿はまだ珍しかった。

（よくもここまで復興したものだ。俺の少年の頃には、このあたりは維新の戦いで焼き払われて、一面の焼野が原だったのに）

男が心の中で慨嘆の^{つよき}呟きをもらした時に、横合いから突然女の声がかかった。

「あのでえ、お前さん。おれ臭生水油の株売ってるがろも、買いませんかの」

男は聞こえぬふりでそのまま行き過ぎようとしたが、二、三歩行ってふと立ち停り、それから引き返して来た。

「いま、何といった？ 臭生水の株だって？」

「そういが」

女は、そうですよという意味の答えを長岡弁でしてから、男の顔を正面から見て、驚いた表情を浮かべた。

「のうお前さん。お前さん、内藤の旦那さんじゃねえですかの？ 県会議員さんの」

「そうらるも——知ってたかや」

答えながら、男もその女の顔を眺めた。

三十五、六の小綺麗な女であった。小さな髻をきちんと結って、さっぱりしたタテ縞の木綿の普段着であった。

女は、いつか長岡で開かれた国会開設請願の演説会に、お茶汲みなどの手伝いにかり出されて、お前さんの顔を見たと説明した。

「ああ、そういがかね」

男は微笑した。女が覚えていた通り、男は県議員をしている内藤久寛であった。長岡からは二十何キロか西の、日本海に沿った石地という村の旧家の当主であった。

県会が開設されて間のない頃で、内藤はこの前年、明治十八年の改選で郷党に推されて立候補し、当選したのだった。その時が数え年の二十七歳、いまが二十八歳で、新潟県会では一番若い議員であった。

内藤は女に、臭生水油の株というのは、どこの株なのかと質問した。

「株といっても、大きな会社や組合の株じゃないがろも。このごろ出雲崎町の尼瀬の海岸で、何十本もの井戸掘って油汲んでいるらう、その株らて。元金は期限が来たら返すし、よけい油が出て大儲けしたら、こつていっぺ配当も出すんですて」

「ふーん、尼瀬の臭生水井戸の株かや」

それなら内藤は、よく知っている。けさも出がけに、その井戸掘りが生埋めになったといつて、大騒ぎしていると聞いてきた。

出雲崎の尼瀬海岸というのは、内藤の家のある石地から北へ、海ぞいの道をほんの一里（四キロ）足らず、歩いても一時間とはかからぬあたりであった。

海岸や町なかの狭い空地に数年前から、明治十三、四年ごろから臭生水を採るための井戸が掘られ始めた。いまではその数は、いかにも女のいう通り、何十本にも、百本にも達しているだろう。

が、そんな臭生水掘りたちを、有力者、財産家たちは「石油師」「山師」と呼んで相手にしなかった。それは彼らの仕事が、ひどく安定性を欠いたからであった。

不安定の第一は、まず「探鉱」にあった。各地を渉獵しやうりやうして、油脈の露頭ろうとうを発見しなければならぬ。それは、油の滲み出ているところ、特殊の岩石の頭を出しているところ、などと、いろいろあるのだから、それによって先ず油脈の存在を見つけ出さなければならない。

時間と経費だけがかかって、成功の確率は極めて低かった。「山師」という言葉は、もともとほ、きこり、かね掘りなどから、山林業者、鉱山業者など、「山」にかかわるまっとうな職業の総称だったのだが、いつか転化して投機的人間の別称となり、ついには詐欺師を意味する名詞にまでなったのは、「探鉱」というものが宿命的に持つ、賭博的ともいえる不安定性に原因するものであろう。

第二に、露頭を発見し、立地を決定しても、施設を整えて油を採取するまでには、ずいぶんの日数と経費が要る。

この時代の油井戸の掘削は、原始的な「手掘り」工法であった。普通の水井戸を掘るのと本質的に同じであった。ただし、油井戸は水井戸よりはずっと深く、普通、浅いのでも二、三十間（四、五十メートル）から、深いのは七、八十間（百数十メートル）ほどであった。ごく稀まれに百間を越える（二百メートル近い）ものもあったが、手掘り工法の能力の限界は、まず百間程度であった。

掘削に要する日数は、五十間程度で百三、四十日、百間近くにもなると一年はかかった。毎日数人から十数人の人夫を使うわけだから、人件費もかさんで、工事費は数百円から千円もかかった。日本の経

済が小さく、個々人の生活も貧しく簡素で、米一升が五銭もなかった当時の金で、である。

しかも、工事の途中で落盤があり、出水があり、崩潰がある。たまにはガスの爆発がある。死傷者が出ることも稀ではない。こうしてその事業全体を放棄せざるを得なくなる場合が少なくなかった。

第三に、これらの困難をくぐり抜けて井戸が所定の深さに達したとしても、果たして予期したほどの油が出るものやら——保証の限りでない。出たとしても、油脈が貧弱で、すぐ尽きることもある。「もっと深く掘れば必ず」と思っても、もはや資金が続かない。

こうして、一夜にして巨万の富をつかみ、どんちゃん騒ぎの大尽遊びに狂うものがある半面で、先行投資の工事費さえ回収できなくて、破産する企業者が後を断たなかった。首吊りが出ることもあれば、出資した親戚、知人までが、一家離散の悲劇に見舞われることもある。そんな悲劇を見て、有識者たちは眉をひそめて歎き合った。

「おのれが大尽気取りになって、贅沢ぜいたくざんまい三昧さんまいに使えば果たすのは勝手だが、世間のアホウどもが羨しがって、俺も俺もと山師稼業に乗り出すのが困る」

そのために、たまたま臭生水掘りが「かたぎ」と談話をまじえているのを見ると、「あしこに人間と石油師が話をしておる」といったくらいであった。

「株の値が上がったり、お前さんが売りにえと思ったら、いつでもおれたちが買い取りますて」女は、続いていた。

それから唐突に、

「ランプですて」

といった。

「なに、ランプ？」

「ランプが殖えて、その油が、こつていっぺいこと、要るんですて」

女は、事もなげにそういった。

「なるほど——」

と腕を組んで、内藤は考え込んだ。

——臭生水は、「草生水」とも書く。読みは同じ「くそうず」である。昔から越後の国のところどころで、大地から滲み出ていた臭い、水のような鉱物油である。火をつけるとよく燃える。すなわち、今日の名称で「石油」のことである。

医薬用として、また灯火用として、幕府時代から商業的な生産はあったが、それは僅かな額であった。灯火に用いても臭すぎるし、煤煙が多すぎるしで、貧しい家でしか使われなかった。

それが急に注目を集めたしたのは、この女がいう通り、明治になって外国からランプが輸入され、一応は精製もされた臭生水油が、その灯油として使われるからであった。しかもランプは恐ろしい勢いで、日本の津々浦々の、一軒残らずの家に普及しようとしている。

臭生水油、すなわち石油の産出されるのは、日本では殆ど越後の国、新潟県一県に限るようであった。ほかにも秋田、長野、静岡県その他でも取れるところはあったが、微量で、合計しても新潟一県の一割にも及ばなかった。

果たして、県下には臭生水油ブームが沸き起ころうとしていた。

「さすが、お前さんら長岡商人は、目のつけどころが違うのう」

内藤はいった。感心したのは、その点であった。

（買う人があるからこそ、こうして臭生水株の仲買人まで生まれたのに相違ない）

これは自分たちも、山師だなどと単純に片付けてしまわないで、十分その事業の内容を点検してみなければなるまいと反省した。

「どうだね、よく売れるかね？」

「そうらね、まアちょこちょこね。買いてえ人も売りてえ人もあるんですて」

女は、内藤をいざなうように首を回して、仲間の女仲買人たちを目で指さした。

女の目にいざなわれて、内藤もあたりを見回した。彼女の仲間である女仲買人は、目の届くあたりに五人いたが、そのうちの三人が、それぞれに客と応対していた。みな物腰が慇懃（いんげん）で、卑しい感じではなかった。

客の一人は、中年のお百姓さん風であった。一人はみなりのいい老人で、頭に半白のちょん髷（まげ）をのけていた。まだ旧風を守り続けているとは、よほど頑固なご隠居なのだろう。

三人目の男は、中年の商人風であった。これは売りに来たようで、株券らしいものを差し出している。相手の女仲買人はふところに手を入ると、むき出しの分厚い札束を無造作に取り出した。何十円あるのか、それとも百円以上もあるのだろうか、指に唾（つば）をつけつけ、せっせとその札束を数えている。

——女は目でそれを示して、無言の笑顔で内藤を見た。なるほど、と、内藤も笑顔でうなずいてみせた。

「しかし、こんげに臭生水株を売り買ひして、油井戸が潰れたら客に迷惑かけるんじゃないかの？ 客に大損させて、お前さんら困ったことにならないかの？」

「ほんに、そんな株は引き受けねですて。潰れるような株は扱わねですて。きちんと油の出る井戸を持った人が、もう一つ掘るとか、後ろに金持ちがいっぱい付いている会社のがとか……こちら信用が大事ですね」

女は無礼な質問にも、怒った気配はなかった。いつも客にそんな質問をされて、馴^なれているのに違^{ちが}いあるまい。

（株といったって、要するに出資証明書、配当の約定書に過ぎないのだが——）

内藤は思った。むろん本格的な会社が出ず、きちんとした株式であるはずはなかった。

いや、一流の事業家や資産家が集まってつくる一流会社にも、当時は法的な規制や保障は、何もなかった。例えば地方で何かの会社をつくろうとして出願しても、

「本願の趣き、追って商法の実施まで、人民相対^{あいだ}の契約に任ず」

民間同士で信頼関係を基本に、然^{しか}るべくやっていてくれ、といった回答しか来ない時代であった。

女仲買人と客との応対に片目をやりながら、内藤は先ほどこから片目では、暮れようとする街の賑わいを眺めていた。道の両側に並ぶ店々に目を走らせていた。

（えらいものだ。目のつけ方が、早いものだ。こんな先見の明と勤勉がなかったら、長岡の町はこんなには復興しなかったはずだ）

そしてその長岡の商人のあり方といったものについて考えていた。

——長岡の藩主である牧野氏は、三河の出であった。戦国時代には今の愛知県豊川市の、牛久保城とあった小城の主で、今川氏に臣事していたが、桶狭間^{おけはざま}の戦いで今川氏が敗退して以来は、徳川家康の臣